

「株式学習ゲームを通じてみる企業」

甲南高等学校3年 濱田 凌佑

株式学習ゲームは、画期的な学習ソフトである。私は最初にそう実感した。その最大の理由は現実の株式相場と、株式学習ゲームとが連動していくからである。ゲームはゲーム、あくまでも仮想空間としての遊びであった。だが、株式学習ゲームは実際の市場と連動するので、ゲームというよりもむしろ、本気の挑戦として私は株の「買い」や「売り」を実感することができたのである。

甲南高校でこのような授業が実践されたことは、非常に喜ばしいことである。通常の授業ではどうしても教科書を中心としたものになるため、理論は理解できても、実践はなかなかできない。数字で例題を解けば、ほぼ必ずといっていいほど問題演習をするだろう。その意味で株式学習ゲームは、実際の経済学の理論を実践化する意味での「問題演習」となったのである。甲南高校の選択科目は豊富であり、この株式学習ゲームが導入されたのは「経済学入門」という授業においてであるが、スタイルがなかなか面白い。生徒の選択者数は 40 人程度なのだが、二人の先生が教えてくださる。一人の先生が理論を、もう一人の先生が実践的なことを教えて下さる。この二人の先生の連携プレーも非常に楽しい。

1 チーム5人の生徒らが8チームを作り、それぞれ株式学習ゲームを使

って実際に株を動かしてみる。重要なのは「売り」ではなく「買い」である。私たちのチームは『四季報』を分析しながら、必死で会社を調べた。有利子負債があるかどうか、といったマイナス的側面からの分析もあったが、営業キャッシュフロー・投資キャッシュフロー・財務キャッシュフローの3つの視点を大切にしながら、どの会社の株が上がるかをじっと見極める作業に入った。その過程で、単純に利益を出すことを目指すのではなく、それ以上に「どの会社が成長するか」ということに懸けることに、私は大きな関心を持つようになった。たとえ株で儲けようと思っていたとしても、私の関心は会社の成長という問題に目が向いたであろう。なぜなら、株式学習ゲームを通じて私が痛感したことは、株は未来への投資だということだからである。

未来への投資という視点で株を認識すれば、得か損かという問題は二次的なものにすぎないとわかる。たとえば私がいずれ結婚し、子供ができたとしたら、私は惜しみもなく子供の教育にお金を注ぐであろう。それは、食費や衣料費といった現在の課題解決とともに、「子供の未来をどう作っていくか」という将来への布石でもあるからだ。それゆえ、株は教育費と似ていると私は感じた。株を買うということは、その会社に懸け、一体となって未来へ進むことである。そう実感させてくれた株式学習ゲームの功績は非常に大きいと思う。ちなみに手持ちの1,000万円で始めた私たちのチームは、株式学習ゲームを通して株が1,600万円にまで増えた。お金が増え

たことも嬉しかったが、会社の価値が上がることでそれを見抜いた自分たちの価値まで上がるような気がした。私たちのチームが買った株の会社の社員が目の前にいたら、きっと熱い握手をしてくるだろう。

「株は売りません。さらなる成長を信じています」と。